

タジク社会における祈りと禁忌の箴言誌フィールドノート

相 馬 拓 也

Field notes on Proverbs for Prayer and Taboo in Tajik Society

SOMA, Takuya

1. はじまりの掟と祈り

タジキスタンのタジク人社会での暮らしには、家庭内でもコミュニティ内にも、禁忌と掟が溢れており、それらは日常生活の箴言や諺によって広く共有されている。これらは、タジク人の行為・態度・慣習・慣例を、いわば「掟」として現在にも厳しく規定している。こうした家庭内禁忌ともいえる掟は、ドゥシャンベなどの都市よりも、地方の農山村でいまでも顕著であり、これら箴言や戒めへの不敬はある意味では脅迫的にタジクの人々の生活に作用している。たとえば、日本に留学しているタジク人女性の学生は、夕刻になると銀座の駅前に生えている街路樹の下を歩くことを嫌がることがあった。それは、「樹木（とくにシダレヤナギ）の下にはや精霊“ジン”が宿りやすく、人間と接触することで悪さをするため」だと教えてくれた。さらに、「クルミの木には悪霊“デヴ”が宿るといわれる。とくに女性は夕刻に一人でクルミの木の下に居てはいけない」とも言われている。とくにシダレヤナギのような枝葉の垂れ下がる樹木はとくに危険とされる。また、「男心にはデヴが宿る」ともいわれ、ときに怒りや感情を抑えられなくなる激情を、精霊憑きになぞらえたものと考えられる。

そのほかにも、さまざまな家庭内禁忌があり、外国人からすると、あまりにも多くの「制約」がありよく暮らしているものだ、と感じることがある。例えば、地方の高齢者や女性は次のようなことを家庭内でよく指摘する。

「お茶は必ず右手で渡すこと」

「落ちた髪の毛をごみ箱に捨ててはダメだから

ね。必ずまとめて埋めなさい」

（＝落ちた歯や爪も同じように埋める）

「落ちた髪の毛を踏まないこと」

（＝髪を他人に踏まれるとその人に頭痛が起きるとされている）。

「他人の足跡を踏んで歩かないようにね」

（＝足跡の主と同じ人生を歩むことになるから）

「ドアの敷居“サンジキ・ダル”に座ってはいけないよ」

（＝境界線に居座ることへの戒め）

「座っている人の背中のすぐ後ろを通ってはダメ」

（＝境界線に居座ることへの戒め）

「人に足の裏を向けてはダメ」

「寝ている人間をまたいでは絶対にいけない」

「太陽が沈む瞬間に寝てはいけない」

Ҳангоми офтобнишин хоб кардан мукин нест.

（＝中途半端な時間に寝てしまい、頭痛が起こることがあるから）

「家の中で口笛を吹いてはいけない」

（＝悪運が訪れたり、精霊が寄ってきたりする）

「家の中で音楽を大音量で聞いてはいけない」

（＝ジンやデヴに魅入られるため）

「夕暮れ時以降に、独りで風呂場や鏡の前に立ってはいけない」

（＝暗闇のなかでジンやデヴが好む場所であるため）

「パンくずをごみ捨て場に捨ててはいけない」

（＝欠片とはいえパンには違いないから大切にせよ“ノン・ハムノン・ノンレザ・ハム・ノン”）

首都ドゥシャンベのハトゥロン地方 Хатлон では、次のような箴言がよく聞かれる。

「爪は金曜日に切るのがもっとも良い。土曜日は爪と髪を切らない方がいい」

“*Аз ҳама рӯзи хуб барои гирифтани нохун, рӯзи ҷумъа ба ҳисоб меравад*”

これは、「土曜日には豚は自分のいかなるものも捨てないという伝承」“*Мегӯянд дар рӯзи шанбе ҳатто ҳуҷ ки ҳайвон аст чизе аз ҳудро наепартояд*”という格言に依拠しているとされる。タジク社会でも、夜には爪も髪も切ってはいけないため、日本の「夜に爪を切ると親の死に目に会えない」という発想と部分的には一致する。また、次のようにも言われる。

「足と手の爪を同時に切らないほうがいい」

“*Нохуни даст ва пойро дар як вақт гирифтан хосияти хуб надошта*”

この行為は「良いことと、悪いことが、同時に起こる」とされることから避けられている。さらに、「早起きは三文の得」に相当するほとんど同一の表現「朝早く起きる人の収入が増える」“*Рисқи одами барвақтхез зиёд аст*”もある。これらしきたりはカブール出身のタジク人にも同じように共有されており、タジク人社会に広く敷衍している。

本論では、フィールドワークで収集された、実際の暮らしの中で使われる一般性の高い諺や格言を箴言誌として紹介し、タジク人社会の精神性や内面文化を素描してみたい。

2. 対象と調査方法

上記のフィールドワーク経験をもとに、本論ではタジキスタンのタジク人社会を対象とした掟・禁忌・箴言、そして祈りにまつわる格言のフィールド調査を実施した。調査は2022年9月～2023年12月の期間、タジキスタンでの2回のフィールド調査と、タジク人ネイティブ話者とのタジキスタン国内遠隔地に居住するインフォーマント（n=60名程度）への直接のインタビューと、電話によるリモート・フィールドワークにより実施した⁽¹⁾。

中央ユーラシアは「多民族共存地域」であり、一般に「タジク人 Тоҷик」はタジキスタン、ウズベキスタン、アフガニスタン、パキスタン、イランなどに共住している。公的データではおよそ2,500万人程度が居住するとされているが[TAJSTAT 2020; World Population Review 2024]、民族名称タジク人を公に名乗ることが政治的に難しい場所もあり、サマルカンドやブハラ、フェルガナなどのタジク語話

者とタジク人に起原を持つ人たちの総数は、筆者の私見では3,500万人以上いると実感している。タジク人の語源は「冠“トージ” тоҷをかぶる人」「Тоҷик」の意味だとされている[Encyclopaedia Iranica. 2024]。これが中国語でムスリムを示す“タージー”「大食人」の語源となった可能性が高い。ただし、タジク語の発音はイラン・ペルシャ語系のaをoに置き換えた発音が多く用いられ、本来は“トジク”(Tojik)が正しい。中国語読みのタージーも、イラン・ペルシャ語系の発音に由来する可能性もある。ただし、本論では国際通用度の高い「タジク」を使用する。

タジク語の祈りと禁忌の箴言は、タジク人の家庭内や社会生活において、行為を制約する不文律として、また社会摂理や節度の道しるべとして、人々の行動判断を感性のメタレベルで規定している。いわばエスノグラフィの源泉となる抽象化された主体性を読み解くうえでも、タジク人社会における箴言とは、日常生活レベルにとけ込んだもっとも重要な思想的・思想的よりどころでもある。そして、言語文化に起因するエスノグラフィの相互連帯については、これまでの社会学研究や、文化人類学研究でも、十分に解き明かされているわけではない。

3. 冠婚葬祭にのぞむしきたり

3.1. 弔問や死亡にまつわる箴言

タジク人社会で暮らしていると、タジク人がペルシャ文化の根幹を成立させた知識人や技術者を輩出したことで、シルクロード全域で尊敬を集めていることがわかる。しかし、ウズベキスタンなどでは、公にタジク人であることを民族賞賛することは、政治的危険によりはばかれている。また、タジキスタンとキルギスのあいだでは、度重なる国境紛争の問題で、キルギス人はタジク人の知性や美貌などを認めつつも、タジク人をおおっぴらに賞賛したりすることはない。容姿が端麗で機知に富むタジク人女性、シルクロード男性の羨望のまなざしでもあり、カザフ人男性やキルギス人男性、とくにウズベク人男性からの求婚の話は多い。ただしタジク人社会では、ウズベク人男性との婚姻は見られるものの、カザフ人とキルギス人との結婚は、女性側の親族が決してこれを許さない。タラス地方出身のキルギス人の英雄マナス(Манас)の妻の一人が、ブハラ出身のタジク人女性サニラ・ビガ(Санира-

бига) だったことは、キルギス人にもタジク人にもよく知られている。キルギスとタジキスタンの国境紛争などの政治問題を抜きにしても、キルギス男性にとってタジク人女性は摘めぬあこがれだけを募らせる、いわば「高嶺の花」の存在となっている。

そんなタジク社会は冠婚葬祭を重んじる習慣が根強く残っており、儀礼への執着と熱意はシルクロードの他の民族以上に強く、かつ厳格なプロトコルが定められている。たとえば、もっとも広く言われている箴言には次のような言葉がある。

「水曜日にはお見舞いを避けるべき」。

“Rӯzi chorshanbe ba didorbinihi bemor naraftan behtar”

この表現には、水曜日はタジク語で“チョルシャンベ” чоршанбе であり、“チョル” = 「4」という忌避数であることから、相手の病気を自分にうつしてしまうといわれている。日本の「四」 = 「死」ともどこか通じるところがある。ほかにも、中高年者にとくに疎まれる行為は次のようである。

「夜ガムを噛んではいけない」(特に親戚の誰かが最近亡くなった場合)

“Шабонгаҳ, сақич хоидан хосияти хуб надорад”

夜ガムを噛むということは、「亡くなった人の骨を噛む」ことと同義とされる。若者は家庭内でこのことで怒られることがある。

「亡くなった人のお宅では3日間は食べるもの(パンや料理など)は一切を作らない」

“Дар хонае ки марг аст, то се рӯз гизо пухтан манъ аст”

「弔問する人はパンを3枚/5枚/7枚など奇数枚で持っていく、偶数(2枚や4枚等)はダメ」

“Хешу ақрабо хурук меоранд ва шумораи нон набояд ки ҷуфт бошад”

このパンは、近所のご家庭で作ってもらうことが多い。偶数は割り切れる数字で忌避数と考えられている。タジク社会には、いわゆる「験を担ぐ」に近い忌避数や忌避日があり、エスノグラフィを読み解くうえでも不可避な感性である。

3.2. イスラーム新年“ナウルーズ”とスマナクにまつわる箴言

イスラームの新年を告げる祭“ナウルーズ”(例年3月21日と前後2日間)(図1)に臨んでも、人々には次のような格言がよく守られている。



図1 ドウシャンベ中心のナウルーズ風景。モニュメント・イスチクロルとスマナクの原料の麦の若芽を模したモニュメント(ドウシャンベにて)

「ナウルーズのときには必ず新しい服を着よ」

“Дар вақти Наврӯз пӯшидани куртаи нав ба ҳамагон ҳатмист”

「ナウルーズの時やその前に怒っている人がいたら、必ず仲直りして新年を迎えよ」

“Дар ҷашни наврӯз бо ҳамаи дӯстон ва хешу ақрабо муносибати дӯстонаро ҳамеша барқарор бояд кард”.

ナウルーズとは新生活や新しい門出を象徴するメタファーでもあるため、人々のなかにも心機一転という思いがある。

「一年の間に亡くなった人がいたら、その家庭ではスマナクは作れない」

“Дар хонае ки дар тули сол “шахсе вафот карда бошад суманак намепазанд (Агар пазанд сабзаҳояш сурх мешаванд)”

スマナク(図2)は、芽生えたばかりの小麦の粒を粉々にして炒めた茶色いペースト状のクリームで、パンに塗ったりして食べる。イスラーム新年のナウルーズのときに、一年間で一度だけ作って食べる。亡くなった人がいる家庭では、スマナクの原料の新芽が赤くなったり、苦くなったりするという伝承がある。このスマナクにまつわる箴言や諺は数多く、タジクの人々にとって食にまつわる重要な箴言資源となっている。

「ナウルーズの新年にはじめて食べるスマナクは小指で試して願い事をするといよ」

“Дар наврӯз ҳангоми ҷашидани якумин суманак бо ангушти майда ҷашида ният ва орзу



図2 バザールで売られるスマナク。この時期、大鍋で作られたスマナクがバザールに並ぶ（ブハラ市のバザールにて）



図3 ドウシャンベのバザールで売られるプロフ（オシュ）。食べるのは12時頃までがお勧めで、午後になると脂が回って味が落ちると言われている（ドウシャンベのコロボンバザールにて）

мекунанд”

次のように願い事をすることもある。

「スマナクの大鍋に小さな石を投げ入れて願い事をする」

“Дар деги суманак сангча партофта орзу кардан”

タジク社会では、よく子どもたちが新年の集いで、こうした小石を鍋に投げ込むことがある。石は鍋底にたまるため、一緒に食べてしまうことはないという。

ほかに、芽吹き始めた春草を摘むことを戒める言葉もある。

「春の最初に咲くタンポポを摘むと雨が降る」

“Меғъянд агар дар вақти баҳор гули бойчечакро чинанд пас аз он борон меборад”

「春の草をなるべく摘むべきではない」

“Алафҳои фасли баҳорро чидан хосияти хуб надорад”

ネイティヴ感覚から推察すると、「何事も焦ってするべきではない」という含意があるようにも感じられる。

4. 食文化にまつわる箴言

4.1. ノン（パン）とプロフにまつわる箴言

小麦パン“ノン”と炒め飯“プロフ”（“オシュ”）（図3）は、タジク人が誇るシルクロードのソウルフードでもある。各地のバザールを訪れても、ウズベク人やキルギス人が経営しているやチャイハナ（食堂）でも、厨房やパン焼き窯に立っているのは

タジク人であることも多い。とくにタジク人の作るパンには、様々な種類があり、その大きさやデザインによって冠婚葬祭などでの用途も多岐に渡る（図4）。とくにサマルカンドのナンは絶品とされ、同じ材料で同じ窯で別の場所で作っても、同じ味にはならないと評判である。一般に、ノンやクルチャ（小さめのノン）を上手に作れないタジク女子は家庭内やコミュニティ内での評判が芳しくない。嫁入りには必須の技術とされ、女兒がなによりもさきに憶えなければならない料理とされている。

なかでも小麦製品にまつわる箴言は多く、いかに人々が食にまつわる祈りと禁忌を重んじるかがうかがわれる。イスラームにも関係することだが、生理中の女性はお祈（ナマズ）を禁じられているほか、小麦粉をこねることも、家畜のミルクを搾ることも禁じられている。理由は不明だが、夕暮れのあとに「白い食べ物」（とくにミルクや乳製品）を人に渡すときは、なかに緑の葉っぱを入れておくと良いとされる。とくにブドウの葉は無味で食味に影響しないため、好まれている。

食事に関する謹言でよく言われるのが、次の言葉である。

「ノラを取られないように！」

“Нолаатро аз дастат нагиранд!”

“ノラ” Нолаとは「ひとつかみの食事」という単語で、これが「人生のチャンス」と読み替えられている。つまり、「人生のチャンスをつかみ損ねるな！」の意味に解釈される。

「仕事は手から、ノラは口から」



図4 バザールに並ぶさまざまなノン（パン）。冠婚葬祭の機会に応じてさまざまなサイズが用いられる（ドゥシャンベのコロボンバザールにて）

“コルロ・アズ・ダスト・ギル・ノラロ・アズ・ダホン”

器用で利発なことを言い表した言葉で、とくに女性が女性に対して使うことが多い。

「食事のときに、欠片（ノラ）が落ちると、誰かが懐かしんでいる、と言われる」。

“Ҳангоми таомули гизо агар нолаи шахс афтад, ин маънои онро дорад ки яке аз шахсони наздики ӯ хоҳиши дидораширо дорад”

ノラと人をつなぐ関係性が、タジク人の食事への向き合い方を表している。これは、落とした人物本人ではなく、隣の人に食べさせると良いとされる。懐かしんでもらえるようにという願いが込められている。

「オシュ（プロフ）を携える人となれ」

“Оши худро соҳиб бош!”

これは年上が目下の人に対して用いる表現で、「自身を識る人物たれ!」の意味となる。プロフというシルクロードの国民食と、自身の成功を掛け合わせた絶妙の表現でもある。

「出されて口にしたパンは最後まで食べよ」

“Хурдани нолаи хеш, махсусан нон, то ба охир ҳатмист”

「女性はお茶を飲み切ってから再び注がなければならない。残ったままお茶を注ぐと、旦那が2番目の奥さんをもろうと言われる」

“Дар пиёла аз болои чой агар дубора чой резанд, мегӯянд ҳамсари он шахс дар оянда ҳамсари дуюм хоҳад дошт”

お茶をそそがれる際に、ときおり家族のあいだでも、お茶碗をのぞき込む仕草を見かけるときがある。これは、茶碗にお茶がどれくらい残っているのかを確かめている仕草でもある。そそがれそうになったら、よくお茶を急いで飲み干す行為が男女ともにみられ、こうした言い伝えに由来していることがある。

「自分の飲みかけのお茶を誰かが飲むと、2人はケンカすると言われている」

“Аз пиёлаи чойи нӯшидаи ҳамсуҳбат чой нӯшидан хосияти бо он шахс муноқишае сар заданро дорад”

こうしたことから、缶やペットボトルでも回し飲みは敬遠される。器を共有する際は、飲み口にふっふっふっ、と息を3回吹きかけて飲む。これは兄弟姉妹のあいだでも行われる。

「主要な食材（小麦・塩・オイルなど）を最後まで使い切ってはいけない。運勢“バラカット”が残るため」

“Хуруқвориҳои хонаро то охир ба итмом расонидан мумкин нест, чунки баракати хона кам мегардад”。

次の補充を行うまでに、とくに主要食材を使い切ってはいけないとされ、一般的な家庭でも厳密に守られている。主要な食材を家から完全に枯渇させてはいけないことを戒める、家訓ともとれる実務的な箴言となっている。

ご家庭訪問でお茶を頂くと、家の女性たちが頻繁に水を汲んで、お湯を沸かしていることに気づく。

「お湯の2度沸かしはあまりよくない」

このように言われることから、冷めたお湯でも必ず入れ替えて沸かす「台所の掟」がある。

そしてよく言われるのが、厨房での所作である。

「料理を作った人の台所に手出しをしてはいけない」

“Ба деги хуруқ пухтаи дигар шахс даст задан амали ноҷое ба ҳисоб меравад”

料理は作るところから、器によそうところまで、その料理を作る人の責任だから。何も言わずに何か付け加えたり、よそったりするのは絶対にしてはいけない。職人気質のタジク人らしい発想といえる。

4.2. 来客を告げる言い伝え

タジク社会では、来客は礼を尽くして迎えること

が家庭内でも、コミュニティ内でも厳格にある種の掟として定められている。突然の来客にも対応できるように、つねに家は整理整頓しておき、客間“ホジュラ”(メフモホナ)が用意されている。調度品にも気が使われており、来客用と家庭用とは厳しく分けられている。こうした「もてなし文化」は、アフガニスタンのタジク人による影響が強いと伝えられている。かつてアフガニスタンでは、自分の敵や親の仇だとしても、客として来訪すれば、誠心誠意もてなすといわれるほど、タジク社会では客人対応は重要である。外国人や遠い場所から訪れた来訪者には、特別のもてなしをする。異国からの旅人“ムソフィル”は、外国にいる自分自身にも使う。“ガリブ”は、とくに外国の異邦人を呼び表す。たとえば、筆者がタジキスタンを訪れた際は、「ムソフィル」として扱われることが多い。ムソフィルには外国にいて、「願いを叶いやすくする立場にある人」という前向きなニュアンスも込められている。本来はイスラームの教えにも通じている考え方でとされている。

厨房や食材、とくにパンに関する言い伝えは多く、ダスタルカン(饗宴)での会食や調理中にも、母親が娘によく話したりする。例えば、来客を告げる言い伝えには、次のような言葉がある。

「パン生地をこねたときに、生地の一部が飛ぶと来客がある」

“Агар хамир дур парад, хосияти омадани меҳмон аз роҳи дурро дорад”

遠く飛ばば飛ぶほど、遠くからの客人が来るとの兆しとされている。

「手に取ったお茶をこぼすと来客の兆し」

“Агар чой чаппа шавад меҳмон меояд”

こぼしたお茶が暖かい、冷たいかで、来客の性格が暖かい、冷たいか分かるとも言われている。

「お茶のなかに茶柱があると来客がある」

“Дар пиёла чой бошад маънои омадани меҳмонро дорад”

この茶柱が長ければ、来客の背が高いとされる。これはタジク中で話されている。ほかにも、「家人がお茶の中の茶柱を折ったら、来客が骨折して、その人が数ヵ月間も家に滞在することになった」、という小噺まであるほどタジク人社会では有名な言葉でもある。

「足の裏がむずがゆくなったら、その日に来客が

ある」

“Агар пой сих занад ба хона меҳмон меояд”

「ムズムズする」を表す“シフ”(сих)はとげが刺さったとき「チクチクする」としても使われる、やや広いニュアンスで用いられる。

食材や食べ物がなくとも、誠心誠意もてなすことを良しとする。例えば、ソグド地方やホジャンドでは社交辞令としてやや大げさな態度で客を迎えることもある。タジク人目線では、それを「ウズベク人的態度だ」と揶揄することもある。同様に、来客に「パンを食べて！食べて！」とおすすめるするときにも地域性があり、クリャーブ地方では口だけで、ホジャンドの人々は「ケチ」、という認識もあるようである。かつてのソグド地方や遠隔地の人々に対しては、タジク人はやや皮肉っぽい認識を持っていたのだと思われる。

5. ほうきや掃除にまつわる言い伝え

タジク社会では、ほうき(箒)“ジョルブ”(図5)には特別の敬意が払われる。ほうきは河辺などに自生するホウキモロコシの草が用いられる。とくに「ほうきを立てたままに置くと、その家の誰かが亡くなる」“Ҷорубро рост гузоштан хосияти хуб надорад”と言われ、子供のころから家庭内でのほうきの扱いでよく注意されている。また、近所や他人の家のほうきを決して借りてはいけないと言われている。ほかにも、ほうきをめぐる次のような戒めがある。

「ほうきを足で踏みつけてはダメ！」

「ほうきで人を叩いてはダメ！」

「来客の前でほうきがけしてはダメ！」

そのためタジク人は、ほうきの扱いをよく心得ている。とくに若い子供や男女をほうきで叩くと、“バフト”(家族・恋愛・子供にまつわる幸運のこと)が逃げるとされ、とくに戒められる。次のように論されることもある。

「夜は家でほうきがけしてはいけない」

“Шабонгоҳ дар хона ҷоруб задан манъ аст”

台所、トイレ、玄関、居間、外のほうきはすべて違うものを使う。家でほうき掛けしたほこりは、すぐに捨てなければならない。そのまま放置すると、“バクト”(運勢)が来なくなるといわれるためである。そのため、女性たちの掃除はテキパキとしていて、見ていて気持ちの良いものがある。



図5 ずらりと並ぶ必需品のほうき。外掃き用、内掃き用など厳格に区別されている（ブハラ市のバザールにて）

“Қоруб барои хона, оишона, барои тоза кардани ҳаҷом ва ҳоватхона ҳатман бояд ҷудо бошад”.

ほうきは、バザールで買うことも、自分で草を刈って作ることもある。秋に草を刈りにとって乾燥させバケツの柄の部分で挟んで引っ張り、枝や突起を取り払う。

「ほうきを捨てて燃やすときは、かならず結んだ紐をほどかなければならない」

“Пеш аз сӯзонидан ё партофтани ҷоруби куҳнашуда онро ҳатман кушода баъдан сӯзонидан ва ё партофтан лозим аст”

「人が出た後にほうきをかけない」（とくに遠い所へ行く来客のあと）

“Баъд аз рафтани меҳмон ҷоруб назадан беҳтар аст”

来客がおいとました後にすぐにほうきをかけると、もう二度と来なくなってしまうかもしれないとされる。「はく」が、人払いをする意味を共起されているためでもある。

「家人が旅に出て、最初の河を渡るまで、ほうきがけしてはいけない」

“Пас аз ба сафра баромадани яке аз аъзоҳои оила то ба макон ва ё аз болои дарёе гузаштани ӯ хонаро намерӯбанд”

ほうきがけは家族の旅や遠出とも関係している。

「その家の幼子が無言でほうきで家を掃除し始めたら、その家の女性がその日に嫁にもられる兆し」

“Агар кудаки хурдсол аз пеши худ бо ҷоруб хонаро рӯбад, маънои он руз ба хона омадани

хостгорҳоро дорад”

これはコミュニティで暮らしていると、女性たちの寄り合い話でよく上がる話題でもある。家の幼子が嫁を貰いに来る人物を直感して、掃除を始めるのではないか、という直感的な分析がとくに女性たちから聞かれることもある。

6. 女兒や女性にまつわる風習や言い伝え

タジク人社会に暮らしてみると、男性よりも、とりわけ女性と女兒にまつわる家庭内禁忌と掟が網の目のように発展していることに容易に気づく。女性たちを見ていると、よくもこの網の目のようなルールのなかで生活しているものだと感心してしまう。例えば、現在でもタジキスタンの地方や遠隔農山村では、女性の海外留学はもっとも忌避されており、コミュニティ内で好まれない行為でもある。「留学した女性が遊びを覚えてしまい、男性との交際や都市生活のうまみをおぼえてしまうから」だという。そして、海外留学した女性のいる家庭には、コミュニティ内でも「女子を留学させた家族」という悪評が立つこともある。家族はこのコミュニティ内での孤立や風評を恐れて、娘や女兒に語学の学習や留学をさせないように仕向けることは、現在でも珍しくはない。コミュニティ成員との同調を崩さない「保守的」な社会的風潮の中で、女子教育が大幅に遅れている社会的要因のひとつとも指摘される。

タジキスタンの女性たちは、こうした厳格な制限の中で、その生を育まなければならない。「女の子の笑い声は、他人が聞こえないくらいでなければいけない」（“Хандаи духтарони хона бояд ба гӯш нарасад”）は、伝統的なタジク家庭では常識とされる。とくに若い女の子や、結婚前の娘は、大声で笑ったり、話したりするのはきつく戒められる。かつてタジク人の嫁選びは、娘の作った刺繍やパンだけを求婚者に見せて判断したと伝えられている。毎日食卓に上がるパン作りや裁縫の腕前は、ある意味では外見や内面にも勝った時代もあった。そのため、「一人の女性を守るということは、大きな城を一人で守ることと同じ」（“Духтарбонӣ – Қалъабонӣ”）と言われるゆえんでもある。タジク文化では「女の子を守る」とは、嫁入り前の娘をきちんと育てること、その子が異性との交際や品行方正を欠いたオコナイをしないように、彼女の行動に責任持つこと、を意味しており、家庭内教育では何よりも重視す

る。「母親を見て娘を撰びなさい」(“Модарро бину духтарро интихоб кун” / “Модар чи гуна духтар намуна”)とも言われるのはこのためでもある。それでも、「タマネギのないピラフがないように、どんな女性にもその女性特有のしぐさや癖があるもの」(“Ош бе пиёз намешавад, духтар бе ноз”)と言われ、その個性を尊重する時代を徐々に迎えている。ところで、女子の髪を結う人は、その頭を最後に優しくたたくことがあり、これは「将来願いが叶うためのおまじない」(“Сарбоф дар пушти сар мезанад то ин ки дар оянда шах одами бодавлат бошад”)とされている。一方で、「髪は長いが、知識の少ない女性」(“Зани мӯйдарози ақл кам”)という表現もあり、美しいだけで中身の伴わない女性を指す言葉として使われる。

タジキスタンで嫁入りしたときには、少々ややこしい嫁と姑の意思伝達方法もある。タジク人家庭では、新婦が男性側の家族と住むことがルールであり、男性側の家族が結婚式の当日に花嫁を受け入れる。そこで、次のような言葉がある。

「娘に伝えて、嫁も推して知るべし」

“Духтарам ба ту меғӯям келинам шунав”

嫁入りした家庭内で、家事や言動などで何か問題があったときに、嫁の義理の母は嫁に直接口で伝えるようなことはあまりしない。あからさまに、叱責することもはばかれる。そのため、義理の母は、実の娘に対して、嫁入りした義理の娘のことで叱責したり、当たり散らしたりすることがある。何もしていない実の娘にとっては、完全なとばっちりのように思われるが、実母と実娘のやりとりによって、嫁が自身の行いを察知して、行動や言動を改めるように仕向けられている。とくに嫁入りしてきたばかりの若嫁には、こうしたきわめて回りくどいコミュニケーション方法で物事を伝えることがある。

さらにジェンダーの点で多くの問題を生む原因の一つに、タジク人社会では、娘に何か問題があったときにも、ほとんどの場合はそのすべてが実の母親のせいにされる。父親は娘に何か問題や不満があった時には、「俺は出ていくからな!」と言って家を飛び出すこともある。これは、残された母親と子どもに家を残すため、タジク社会では家主が「出ていけ!」とはあまり言うことはない。そのため、旦那の側が出ていくのが、タジク社会の家庭内の掟らしい。タジク人女性は社会生活のほとんどの場面で、

男性からの被抑圧的立場にあり、タジク人女性の社会進出を難しくしている直接の原因ともなっている。一見不可解ともいえるまさに責任の「転嫁」によって、タジク社会の家庭内の人間関係は少々複雑でもある。

7. 考察とまとめ

本論では、予備的なフィールドワークで収集された箴言・格言・諺などを、雑駁に紹介した。こうした格言はほんの一部であり、とくに女性や女兒に対する箴言として、守られることを家族や親族からも強く要請される。あまりにも多くの禁忌があり、タジク社会での暮らしが制約に満ちたものであることがわかる。ただし、タジク社会で暮らしてみると、これらの家庭内禁忌や掟が、《精霊憑き》や《邪視緊縛》“チャシム・カルダン”から身を守る、ある種の「防霊術」であることが見えてくる。現在も、タジク社会では精霊憑きや憑依が強く信じられており、精神疾患や体調不良をはじめ、人生のあらゆる不幸の直接の原因と考えられている。そのため、これら家庭内禁忌や掟とは、心身ともに健やかな暮らしを願う、見えない《祈り》でもある。そのため、タジク人の行動原理の深層に到達することを困難にもする一因ともなっている。こうした《祈り》と《禁忌》の箴言誌とは、「エスノグラフィ」として観察される人間行動の上位判断プロセスに相当する《メタ・ナラティブ》のひとつの表現型ということもできる。

箴言には数多くの祈りを含意する一方で、女性の社会進出を拒むコミュニティ内の慣例や慣習に直結することも多く、家庭内禁忌による社会統御がきわめて強く作用していることに驚かされる。それは、タジク人男性による「嫁取り」の場面にとくに色濃く表れている。タジク人社会では、恋愛結婚による婚姻関係の成立が、現代でも少なく、ドゥシャンベなどの一部の地域に限られているためである。そのため、「理想的な女性像」の形成に、こうした格言と箴言が利用されている点も否めない。本論では、エスノグラフィという行動原理を司るメタレベルの思考源としての可能性を、ことわざ・箴言・格言などを箴言誌として試論した。今後は、箴言誌から社会・文化を紐解く言語文化と社会調査の融合が、より包括的なタジク人社会の実態を浮き上がらせるものと考えられる。

- (1) 本調査では、ハトロン州ドゥシャンベのほか、タヴィルダラ村、ダルボーズ村の人々が含まれる。そのため、タジキスタン南部、中部地方の言い回しが卓越していることを明記しておく。

参考文献

- TAJSTAT (Agency on statistics under the President of the Republic of Tajikistan). 2020. “Results of Population Census and Housing 2020”. [<https://www.stat.tj/en/population-and-housing-census/>] (Last accessed 11th December 2024).
- World Population Review. 2024. “Afghanistan” [<https://worldpopulationreview.com/countries/afghanistan>] (Last accessed 11th December 2024).
- Encyclopaedia Iranica. 2024. “TAJIK i. THE ETHNONYM: ORIGINS AND APPLICATION” [<https://iranicaonline.org/articles/tajik-i-the-ethnonym-origins-and-application>] (Last accessed 11th December 2024)